

母なる海の声

青山光二

新潮社

青山光二

新潮社

母なる海はは うみ こゑの声

一九八七年二月一日印刷
一九八七年二月二十五日発行

著者 青山光二あおやま こうじ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—266—5111

（編集部） 03—266—5411

振替 東京四一八〇八

印刷 東洋印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

定価 一三〇〇円



© 1987 Kōji Aoyama
Printed in Japan
ISBN4-10-332305-1 C0093

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

目次

一章 父島の夜の渚で 5

二章 ナポリへ 113

三章 落日と綺羅の入江と

装画
山田弘子

母なる海の声

一章 父島の夜の渚で

三方を緑濃い丘に囲まれた二見湾の淡いコバルト・ブルーの海面を、小気味よく明るい亜熱帯の陽光が直射していた。

港灣の東南岸に当る扇浦の海べりから、齒朶^{しだ}やギンネムの密生している小道をほんの少しばかり上った所にある台地に、黒川敬は妻と二人で立っていた。

台地といっても、ガジュマルや檳榔樹^{びんろうじゅ}の大木や、長い尖った葉の伸び具合が髪を振りみだした風情に見えるタコの木などが繁茂したあいだに、雑草に蔽われたわずかな平地があるだけだった。ガジュマルの厚ぼったい葉は深緑色で光沢があり、檳榔樹は幹も緑色だった。台地の一方は赭土^{あかつち}の崖になっていた。

平地の一隅に、文久元年（一八六一）ここに据えられたという、人間の背丈の倍ほどもある新墾^{しんはり}の碑^いが建っている。

碑文には、小笠原島というこの島の名のある所以^{ゆえん}から説きおこして、文久元年十二月、幕命に

より外国奉行水野筑後守忠徳ただのり以下の一行が島内踏査のため荒海をこえて出向いてきたこと、さらに、小笠原の島々が日本国の領土であることなどが、修辭過剰の曲りくねった、遠まわしな表現で述べてあった。

水野忠徳ら二十名ほどの幕府役人が軍艦かざりんまる威臨丸でこの島へきたとき、この巨大な碑を運んできたということになっているのだが、果たしてほんとうだろうかと黒川は首をかしげた。

黒川が首をかしげた気持は、碑に刻まれた馴染みにくい、模糊とした文章の内容そのものに、現代いまとなつては客觀的信憑性に欠ける部分があることも関連していた。小笠原島と日本国とのさいしよの関わりあいについては、文禄二年（一五九三）に小笠原貞頼さだよりなる大名が発見したという伝説めいた云いつたえと、延宝三年（一六七五）に長崎の人、島谷市左衛門が幕命によつてこれらの無人島を探検し、物産を持ちかえり、精細な地図を示して島の模様を報告したという、事実と考えてよさそうな記録とが並立しており、黒河主水春光もんどとある碑文の作者は、前者の小笠原貞頼発見説を何の疑念もなさそうにまことしやかに述べている。ところが今日では、小笠原貞頼発見説は根拠のない伝承にすぎないということが、歴史家の研究によつて、ほぼ明確になつてゐるのだ。今日どころか、小笠原貞頼発見説の信憑性については、「新墾の碑」が建てられたという文久元年頃、すでに問題となつていて、小笠原島開拓着手にあつたの閣老安藤信正のぶまさの諮問に答えた林大学頭だいがくのくみの報告にも、小笠原貞頼なる人物の実在しないことが述べられている。

もつとも、大小約三十の島を総称して小笠原島とよぶ群島のさいしよの発見者が誰であろうと、また「新墾の碑」がいつ建てられたものであらうと、黒川敬にとつては、まったくどうでもいい

ことなのであった。

いまから百二十年余り前の文久元年十二月、幕府役人に艦長以下乗組員までいれると百名近い人数になる日本人を乗せた軍艦威臨丸は二見港の北寄りの恰好の場所に碇をおろしたが、そこは、『ペリー提督日本遠征記』へ合衆国海軍省編、一八五六によれば、それより八年前の嘉永六年（一八五三）、米國艦隊旗艦サスケハンナ号に座乗して小笠原・父島を訪れたペリー提督が、波止場・貯炭所用地として一部を買収した清瀬地区の、あたかも沖合いに当たっていた。「岸近くでもかなりの水深があるので、栈橋を五十呎突出して設ければ、最大の船舶でも容易に近よることができ」と同書にある。

二見港の北岸には文政十三年（一八三〇）頃から、米国人、英国人、フランス人、イタリア人、ポルトガル人、デンマーク人、それに太平洋の島々の土人などが入植して住みついており、ここで生れた子供や、一八三〇年よりもっと以前に近海で遭難した捕鯨船の生きのこり乗組員などゝいて、ペリー提督がきたとき、父島住民の総数は三十数名であった。ペリーは四日間ほどの小笠原島滞在のあいだに、彼らに植民自治体のようなものをつくらせ、三項目十三条から成る法令を定め、提督自身とおなじ五十九歳のアメリカ人ナサニエル・セイヴオリを チーフ・ジャストリート 首長に任命している。

八年が経ち、水野忠徳らの一行が二見港北岸東寄りの奥村地区に上陸したときも、セイヴオリの住居の屋根の上には星条旗がひるがえっていた。屋根はビロウ椰子の葉で葺いてあった。

ナサニエル・セイヴオリは典型的にフレキシブルな、練れた人物だったらしい。日本の領土権

回復のために派遣された江戸幕府の外国奉行水野筑後守忠徳が、この地は古来日本国の領土であるが、無断で住みついたお前たちに今さら退去せよとは云わない、しかし、未開拓の場所については、今後許可なくして草木の一本たりとも採ること相ならぬと申しわたすと、委細承知つかまつたと、一も二もなく叩頭して答えている。通訳に当ったのはアメリカ帰りの漂流民ジョン万次郎こと中浜万次郎である。外国人住民の帰順を確認してから、外国奉行はさらに、間もなく日本の開拓民が来ることになっているが、その方ども「末永く和合いたし相暮し候よう」と、懇々説き聞かすところがあった。

このときの水野忠徳と住民代表ナサニエル・セイヴォリとの問答内容をはじめ、在島八十日間におよんだ小笠原島巡検使節団の行動・生活等については、外国奉行に随行した目附服部帰一の『南島航海日記』や同じく外国奉行支配調役田辺太一の『幕末外交談』に詳述されている。一行は父島ならびに母島の地形の測量、地質や産物の調査などを精力的に行ない、さらに、数カ条からなる簡単な島規則、港規則を定めて、文久二年三月、咸臨丸で父島をひきあげていったが、水野の配下の外国方定役小花作之助と通訳係を含む定役・同心五名が、小笠原諸島管理の事務を執るため父島に残留した。仮役所・官舎・倉庫等の急ごしらえの建物や、咸臨丸乗組の大工らによって、すでに海岸近くに建設され、倉庫には食糧のほかボートや火縄式小銃数挺まで格納されていた。

おなじ年の八月、小笠原島にいちばん近い日本の領土である八丈島で急遽募集された移住民三十八名が、幕府軍艦朝陽丸によって父島へ送りこまれ、扇浦のあたりに上陸すると、現地長官と

もいふべき小花作之助や役人たちがおおわらわで面倒をみたり、なにかと指図したりした。

「こういう物が建っているところを見ると、日本人のさいしょの入植者がやってきたのは、たぶん、このあたりなんだろうな」

「新墾の碑」の前に立ったまま、ジャングルさながらの周囲を見まわして、黒川はつぶやくように云った。人の姿はどこにも見えない。扇浦とよばれるこのあたりに、人家は一軒もなく、海べりの道路ぎわに浄水場の事務所の白い建物があつて、数名の人がそこで働いているだけだった。妻の年子が、

「たぶん、じゃなくて、ここにきまつてますわよ」

「まあそうかな」黒川は、薄笑いをうかべた。「ところで、三十八人とかの入植者のなかに、おれの曾祖母がいたんだ。……あきれるね」

「ほんと」うなずいて、年子が云った。「日本の国の南の端の、こんな寂しい所へ、よくまあ……」

「まだその頃は、小笠原島が日本の領土とはつきりきまつていたわけじゃない」

「あら、そうなんですか」

そんなめんどろなことはどうでもいいという調子で年子は云つて、淡い黄色の花をつけたイチビの小ぶりの枝を折りとつた。

十二月も半ばを過ぎているのに、この地の気温は二十度をこえている。

東京から南へ千五十キロ、北回帰線に近いこの島に曾祖母みわが両親とともに、いた。みわは、

そのとき十六歳。彼女がのちに、黒川の祖母マツを生み、祖母が父を生まなければ、自分はいないのだと思うと、彼は妙な気がした。

「いまでも、外国版の世界地図を見ると、小笠原諸島はたいてい BONIN ISLANDS となっている。小笠原島とよぶ前は、この群島を単に無人島と日本人はよんでいた。無人島がブニン島になり、さらに訛って BONIN だ。父島は PEEL ISLAND で、二見港は PORT LLOYD。日本人より前から父島に住んでいた外国人は、ここは英国領かアメリカ領か、どっちかだと思っていたはずだ」

「よく日本領になりましたわね」

「幕末から明治維新の頃の政治家の腕がよかつたんじゃないのか」

文久元年、幕府は駐日各国公使に小笠原諸島の回収を通告したが、それまで、これらの島の領有宣言というほどのことをした事実があるわけではなかった。さいしよに小笠原島の領有を宣言したのは英国である。文政十年（一八二七）、英国軍艦プロツサム号の艦長、ピーチーが島々を発見し、国王ジョージ四世の名において、これらの群島を英領とする旨を銅板に彫ったものを、彼自身の名をつけた主島 PEEL ISLAND（父島）の、これも彼が名をつけた BLOSSOM VILLAGE（ニクソン・ジャック 洲崎）海岸近くの大木の幹に埋めこむように釘で打ちつけ、国旗を掲げて英国領であることを宣言した。そんなこともあつて英国は、小笠原島に関し、日本の独占的領有は認めがたいとし、万国共有とすべきだという見解を示した。すなわち、日本が第一発見者であることは、その後、認めるにいたつていたのである。一方米国は、領有を主張しうる明確な根拠を欠いていたため、極東政策上の見地から小笠原島がライバルである英国の領土となることを恐れ、むしろ日本の領

有を望んでいた。明治九年（一八七六）、新政府の活躍によって最終的に日本の領有権が確立される以前の、小笠原島をめぐる国際的情勢は、おおよそ以上のようなものであった。

「腕もよかったが、昔の政治家や役人は実によく働いた。父島、母島、兄島なんていう島の名や、二見港とか、この扇浦とか、大村、清瀬、奥村……、そのほか山や湾の何十という名前だって、みんな、文久元年に咸臨丸でやってきた幕府の役人連中が一生懸命考えて、付けていったんだ」「誰かさんみたいに不精者じゃないから」

「なにもシャカリキになって地名を変えることはなかったと思うよ。小笠原島なんていうより BONIN ISLANDS の方がよっぽど。PORT LLOYD もわるくないね」「通用しませんよ」

八丈島で駆りあつめた移住民を無人島同然の小笠原島へ送りこむについては、幕府当局は格別の援助奨励措置を講じている。軍艦朝陽丸は移住民といつしよに各種農産物の種や苗のほか、当座の食糧として玄米二十五石、麦二十五石、乾飯ほしめし三石を積んで行ったが、さらに、江戸で用意した切組材木も積みこんでいた。

三十八名という移住民の人数のうち八名は、大工、木挽、鍛冶等の出稼ぎ職人で、ひととおり用がすめば、船便を得て八丈島へ帰ることになっていた。これらの職人が主体となり、総がかりで住居の建設作業が急がれた。扇浦地区の仮役所の近くに、十五戸ほどの家屋や道具小屋のようなものがやがて建ちあがった。

農地の開拓が進み、開墾可能な土地を先住の外国人移住者からも買いあげたという記録がある

から、外国人は、二見港北岸の奥村や大村地区だけではなく、東南岸の扇浦に近いあたりまで開墾の手をのぼそうとしていたとも考えられる。

入植の翌年文久三年の五月までに八丈島からの移住民が開拓した耕地は八千坪余りといわれるが、その間、彼らの生活必需物資や食糧を補給するため、朝陽丸は本土と父島のあいだを七回にわたって往復した。外交政策上の急務として、是が非でもある程度、植民開拓の実績をあげる必要があったのだろう。

移住民三十名は十一家族から成っていたようだ。幕府は移住民を募るにあたって、まず、長男以外、二男三男等を夫とする夫婦者を原則とした。人口過剰で慢性的食糧不足に悩む八丈島では、当時、土地建物の分割相続を認めない厳密な長子相続制が布かれており、二、三男以下は家を建てることさえ許されず、島外へ出るか、小屋掛けで生活するほかはない状況だったから、一人につき手当として金五両と木綿三反が支給されるという小笠原島入植の話は、かなり魅力に富んでいたはずだ。幕府はまた、移住民募集の条件として、男女各十五名、あわせて三十名の頭数をそろえるよう地役人に指令していた。判じ物のようだが、地役人は指令通りの答えを出した。つまり、移住民のなかには四家族にわたって、八歳から十六歳までの男女各四名、合計八名の未成年者がいたのである。黒川敬の曾祖母みわは、笹本松次郎、サキ夫婦の一人娘だった。

「夏草やつわものどもがなんとかつていうけど、人が住んでいた跡つてものが何もないのね」
「当り前だ。一世紀以上も経ってるんだ」

「新墾の碑」の傍に立った黒川を、年子カメラにおさめた。

「それに、この扇浦のあたりに日本人の一団が住んでいたのは、ほんの一年たらずのあいだらしい」

「すると、お義父さんはここでお生れになったんじゃないんですか」

「小笠原は小笠原だが、親父の生れたのは母島の沖村という所だ」

黒川は、父のことを八丈島出身だと永いあいだ思いこんでいた。小笠原・母島の生れだと知ったのは、父が死んで三十年ほど経ってからだった。

八丈島からの移住民の開拓生活は、わずか九ヵ月で打ちきられている。文久二年八月、薩摩藩士が英国人三名を殺傷した、いわゆる生麦事件が起こり、犯人逮捕の要求に応じない幕府に対して、翌年二月、英国は正式陳謝と賠償金十萬ポンドの支払いを迫った。さらに英国は、東洋艦隊を横浜に集結させ、賠償金の支払期限を五月十日とする最後通告をつきつけてきたので、幕府は、もし戦争となった場合、小笠原島の日本人が襲撃されることを惧れて、五月はじめ朝陽丸を現地へ急行させ、役人をふくむ移住民全員の引揚げを命じることとしたのだといわれている。

「おれの祖母は八丈島で生れている。ちよつと変った婆さんだつた。そのお祖母さんはよく知っているが、お祖父さんの方は、茂三郎という名前以外、何も知らない。小学生のとき、両親といっしょに大島へ行ったことがあるけど、そのときもお祖父さんに会った記憶はないんだ。出稼ぎにでも行つて留守だったのかな」

「出稼ぎだなんて」

「いや、舟で漁に出ていたということは考えられる。少し離れた所へ——」見当はずれなことを

云っているという気がしなくてもなかった。「歴史の本を見ると、祖父と祖母が結婚した五年ほど前に、小笠原諸島は正式に日本の領土になっている。二人は結婚して間もなく、八丈島から母島へ移住したようだ。どうも、墮落ちというニュアンスが匂ってくる」

「まさか……」と年子は、相手の云うことをまったくの冗談としかうけとらず、失笑して、云った。「でも、どうして父島でなくて、母島なのかしら」

「母島の方が暮しやすいということになっていたんじゃないのかな。土地が甘蔗さとうきびの栽培に適していた。砂糖がつくれる——」

「……明日が楽しみだわ」

翌日の船で母島へ渡ることになっていた。母島の、黒川の父が生れたという土地を見るのが楽しみだと、年子は云っている。

『小笠原島へ行きましょうよ』

と年子が云い出したとき、彼女がそう云った意味は、黒川の父の生れた土地を見に行こうというところにあるのは明らかだった。年子が黒川と結婚して間もなく病死した義父を追慕する彼女の気持が深いのは、ほんの三度ばかり会っただけの義父が彼女を気にいって、永くあとをひくほどの心の交流が義父とのあいだにあったということからのようだ。三度ほどしか会う機会がなかったのは、黒川の父が外国航路の貨物船の船長で、半年か一年に一度くらいしか日本へ帰ってこないのが常態だったからだ。太平洋をこえて米国西岸まで船で十日とはかからない現代とは違って、半世紀近くも以前の船乗りの生活はそんなものだった。